
いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ～

イグス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか天魔の黒ウサギ〜予言なんてどうにかなるさ〜

【Nコード】

N8990Y

【作者名】

イグス

【あらすじ】

転生者、四ツ葉麗矢は突然いつか天魔の黒ウサギの世界に突然飛ばされた。

色々な能力が入りチート主人公

プロローグ（前書き）

初めまして、イグスです
暇と時間さえあれば小説書いていきたいと思っています

プロローグ

此処は何処だ？

俺は辺りを見渡す、辺りは一面真っ白な世界だった

（それにしても一面白い世界だな…何なんだ此処）

「やあやあ、こんにちは！君」

突然目の前に現れた白い服着た女性が現れた

「えっと…どなたですか？」

「私？ 私は神様だよん」

は…？ 今何て言った、コイツ…

「だから、神様だってば、後ついでに言うとか此処あの世ね」

「（コイツエスパーかッ！）てかえっ！？ あの世！？」

「そう、あの世だよ、君は死んだんだよ、アタシが間違って時妙無くしちゃった ごめんね！（てへっ）」

バシッ！！

俺は思いつきり神の頭をたたき、結構良い音したな…

「痛いっ！ 何で叩くの！？」

「当たり前だろうが！ 何人の時妙無くしちゃった だ！ふざけんな！」

「まあまあ、落ち着いてよー、ちゃんと謝ってんじゃん」

「お前から反省の色が見えない」

「そう？ 私なりに反省してるんだけど？」

「ソウデスカ」

何だろう、この神様イラつくな…

「なあ、そう言えば、何で俺は天国にも地獄にも行かずにこんなところに居んだ？」

「あ！そう言えば忘れてた、君を此処に呼んだ理由はね他の場所に転生させるためだよ」

「転生だと？」

「そうだよー、アタシのせいで君の時妙無くしたんだしね、そんなにいいしないと、君の行きたい世界や場所ならどこでも」

「そう言われてもね、んーそうだな…じゃあ「いつ天」の世界で一度行ってみたかったんだよな、いつ天の世界

「了解、じゃあじゃあどんな力が欲しい？」

「力？ 何個でもいいのか？」

「オマケデ何個でもいいよ」

「そうか、なら…」

そう言ってポケットの中を探る、おっと有った有った

俺が中から出したのは紙と鉛筆そこに色々な能力を書いていく。

数分後、書き終わるとそれを神様に渡した

「ふむふむ、なるほどね…結構書いたね君、まあ問題ないけどさ」
なんか不安何だよな…この神様

「そうか、ならよろしく頼む」

「了解、そんじや行つてらっしゃい、良い人生を」

神はそう言つと、指を鳴らしたすると俺の視界が暗くなった。

ブローグ（後書き）

誤字などありましたら、教えてください、ではではまた次で！

転校生（前書き）

今日は、イグスです

更新しましたー！

これからも頑張りたいと思います

転校生

俺は、目を覚ました。

（知らない、天上だ・・・）

俺は体を起こし、辺りを見渡す、どうやらここは自分のへやのようだ、ん？

俺は、机に手紙が置いてあることに気が付く

「んー、何々？ 神様から？」

やつほー！神様だよん！この手紙はいつ天の世界に送ったのを報告するためにかいたぞー

後、今の君の状況を説明するとだねー、君は独り暮らしで、これから宮坂高校に転校するんだよねー、だからまあ頑張つてこの世界で第二の人生頑張ー！以上！神様からでしたー。

追伸、能力はちゃんと君の言う通りしたからね

「神様軽すぎるだろ・・・」

俺は読み終わると手紙を折り畳み時計を見ると、8時半を指していた

「うお！？ 結構ギリギリじゃね？」

俺はあわてて制服に着替えると「腑罪証明」を使って学校に向かった。

数分後

俺は教室の前にいる、あの後校長にあつて教室を案内されたら、まさかの黒鉄大兎がいるクラスに転入だよ、

「では、四ツ葉君、入ってきなさい」

お、先生から呼ばれたな、なんか緊張するな
俺はそう思いながら教室に入る

「四ツ葉春樹です、よろしく願いいたします」

「
そう言っ
て俺はにこやかスマイルを
すると、数人の女子がの顔が赤
くなっ
てた、何でだろ？」

挨拶は、まずまずかな？ 席はつと・・・

「先生ー、黒鉄君の後ろが空いてるからそこでいいと思いまーす」

一人の女子が言っ
と、先生も承諾した
ようなので俺は、黒鉄の
後ろに座ると、

「俺、黒鉄大兎よろしくな！」

「俺は四ツ葉春樹だ、春樹でいいぜ？ 黒鉄も大兎でいいよな？」

「ああ！」

大兎結構いいやつだな、元氣いいし
すると、大兎の隣の女子、時雨遥も自己紹介してきた。

「私、時雨遥よろしくね、四ツ葉君」

「よろしく、春樹でいいぜ？」

「なら、私も遥でいいよ」

ふむ、これでいつ天の主人公と、メインキャラクター二人と接触できた、後はヒメアに紅と未雷とセルジュとハスガか・・・、あ、後黒守と泉だけか、結構いるなー、まあなんとかなるか、そう言うてる内に昼休み

俺は死んでいた、なぜなら、クラスの女子が休み時間になって毎回俺の回りに来て、四ツ葉はどんなことしてるの？とか、色々と質問攻めされて休める時間がなかったからだ、まあ全部答えましたよ？ 周りの男子からは、なんか睨まれるしさ、疲れたよ

そして俺は昼休みになると女子から囲まれる前に素早く教室から逃げ出して学校の自動販売機の前にいる、

「ああ、転校そうそう、なんなんだこの疲労感・・・」

俺は自動販売機でコーラを買うつと、教室に戻ろうとすると、

「おい、貴様」

「ん？誰？」

俺は振り向くと、そこには紅月光がいた、すると

「おい、貴様それを寄越せ」

自動販売機を見るコーラのボタンに売り切れと、書いてあった、どうやら俺の買ったので西後らしい、他の自動販売機を見るとどうやらコーラは売られてないらしい、すると俺は紅月光に言った

「嫌だ」

ザンツ！

「うをお！？」

月光は剣を鞘から抜き斬りかかってきた

何なんなのこいつ！？　どんだけコーラがほしんだよ！
そう思いながら、俺は剣の攻撃をすらすらと避ける

「何故攻撃が当たらない、糞が、さっさと寄越せ」

「いきなり、斬りかかる奴にやるかアホ！」

「誰がアホだ」

「お前だ！」

「俺は天才だ」

そう言いつつ、月光は攻撃をやめようとしな

何！？　何なのコイツ、うざいんだけど！

俺は思いつきりバックステップをすると、そのまま全速力でその場から離脱した。

「ちっ、逃がしたか・・・」

月光は剣を鞘かに納めるとその場を後にした

転校生（後書き）

こんな感じになってしまった。orz
やっぱり小説書くの難しいですね
頑張らないと！

疲れた（前書き）

今日は！イグスです
今回は短いです

疲れた

結局、俺は紅月光のせいで昼休みもろくに休めず午後の授業を受け、HRの真つ最中である。

「まさか、初日でこんなに疲れるとは・・・」

ただいま、俺机に顔を沈めて脱力中

「大丈夫？春樹君」

「ああ・・・遙、大丈夫に見えるか？春樹の奴」

「見えない・・・」

大兎と遙は優しいね、それにしても疲れた、マジ疲れた、女子に質問攻めされるは、月光には斬りかかられるは本当に疲れた、HRが終わると俺は鞆を持ち

「俺帰るわー」

「おう、じゃあな春樹」

「さようなら、春樹君」

「おー、大兎と遙じゃあなー」

そう言って手をふりながら教室を出て、「腑罪証明」で家まで戻る、

「あー、本当に疲れたな、それに腹減った」

俺は、キッチンに行き冷蔵庫を開ける

・・・何もない、はぁ・・・買い出し行くか

俺は、制服から私服に着替えると家を出て近くのコンビニに行く

「今日は、弁当類とサラダだけでいいか・・・、おっと、明日の朝食も買わないとな」

色々食材を買ってコンビニから出ると、

ドンッ

誰かとぶつかった

「おっと、済まん、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

あれ？ コイツもしかしてアンドウのミライ？

「何々？私の顔になんかついてる？」

「ああ、済まん、ばーっとしてただけ」

「ふーん、そうなんだ、あっそう言えば、ドクターペッパー買わなくちゃ！」

そう言っつて、未雷はコンビニに入っつていった

ふむ、以外と可愛かったな、おっとそろそろ帰ろ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8990y/>

いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ～

2011年11月30日13時50分発行